

16は中世の遺物である。高台の幅が狭い一方で底面は分厚い。内面には底面と胴部の境界に稜が残される。このような特徴から、中世に大陸から輸入された白磁と考えられる。

17～19は石器である。17は、円礫を利用し、側縁と端部の縁辺と平坦面に敲打痕が残る。18は片側が幅広になる棒状の礫を利用し、平坦面に敲打痕が残る。19は方形を呈する棒状の礫を利用し、表面に擦痕が残る。弥生時代から古代に伴うと見られる。

20～29は近世の遺物である。いずれも攪乱層から出土した。20～23は磁器の碗である。21の内面には赤絵が施される。27の器面には「寿」の字が崩した書体で描かれることから、祭礼用の器と考えられる。28は磁製の戸車である。29は仏飯具と考えられる。底面には糸切りによる同心円状の痕跡が認められる。

第Ⅲ章 まとめ

出土した弥生土器はいずれも中期に属する。弥生時代の資料は、西田第3遺跡の南に近接する東宮遺跡では後期から終末期の土器が出土するほか、丘陵の西端に立地する市位遺跡では、中期から後期にあたる遺物が多量に出土する。近年発掘調査された津和田第2遺跡でも当該期の遺物が出土する。

古墳時代から古代について、調査区からは、土坑や掘立柱建物、溝状遺構が検出された。現代の造成が著しいため検討は困難であるが、当該期、調査地は居住地などに利用されたと考えられる。近接する東宮遺跡からも遺構・遺物共に多量に出土することから、本遺跡は東宮遺跡から続く集落の一部と考えられる。周辺では先に述べた市位遺跡からも多量の遺物・遺構が確認されている。丘陵の東端と西端に同時期の集落が存在した点は興味深い。

近世の遺構は確認されず、陶磁器が僅かに攪乱層から確認された程度である。東宮遺跡の発掘調査中、調査担当者は、調査区の北隣にかつて庄屋宅が存在したという言い伝えを地元の方より伺っている。今回の調査で屋敷跡が検出できたわけではないが、西田第3遺跡が東宮遺跡の北に立地することや、出土遺物の中に、祭礼用や赤絵の染付など、庶民では入手困難な遺物が含まれていることを考えると、調査地が庄屋宅あるいはその一部であった可能性が考えられる。

(参考文献)

宮崎県埋蔵文化財センター編 1998『市位遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書

宮崎県埋蔵文化財センター第10集

宮崎市教育委員会編 1999『東宮遺跡』宮崎市文化財調査報告書 宮崎市教育委員会 第39集